

座談：「東欧史」研究に展望はあるか

小沢弘明

木村真

佐原徹哉

篠原琢

鈴木広和

司会・編集責任：北村暁夫

1989年1月23日、氷雨のそぼ降る夕暮れ時に、東京大学文学部西洋史学科の暖房の切れたゼミ室で、いわゆる「東欧」と言われる地域の歴史研究を行なっているクリオ同人たちによる座談が開かれた。1989年の秋・冬は、いまさら言うまでもなく、「東欧」が激変した季節として歴史に刻印されようが、この座談は、それに先立って催された記念碑的な記録である。

司会：寒い中、お集まりいただきましてありがとうございました。

さて、かねがね私は感じておりましたが、イタリアやロシアといった地域の研究会には、団塊の世代の研究者が多いわけです。それは何故か、という問題もそれなりに興味があるところですが、さしあたりそれはおいて、それから十年後の世代を見てみますと、少なくともクリオ同人の間には、「東欧」史研究者が非常に多く登場してきました。これを偶然といってしまえばそれまでですが、そこに何らかの、必然性とは言わないけれども、きっかけがあったと考えられるのではないか。それが第一の興味であります。

ところで今、私は何気なく「東欧」という言葉を用いましたが、「東ヨーロッパ」をまとめた研究対象として措定できるのか、という問題は、実はかなり深刻な難しい問題でもあるわけです。この問題を「東欧史研究会」という名称の研究会の会員でもある人たちがどう考えているのか、というのもまた興味のあることです。そこで、そういった諸々のことを、当事者である皆さんに、率直に話し合っていたきたいというのが、今回の企画の趣旨であります。

それでは、先ず皆さんに、研究をはじめられたきっかけ、現在までどのようなことを研究されてきたか、研究が抱える問題は何かを、手短にお話しただきたいと思います。

(※紙数の都合により、研究を始めたきっかけ、現在までの研究の足跡については、編集させていただきました。)

佐原徹哉 (1963年生れ：左翼的なカルチャーの中で育って来た、と自称するサハラは、社会経済史および帝国主義論に早くから関心を持っていたという。大学時代に、アミン、フランク、ウォーラステインに出会い、ますます「ペリフェリー」に対する関心を強める。卒業論文では、セルビアの農民蜂起を扱い、この蜂起がナショナリズムというよりはリージョナリズムに近いものであり、オスマン帝国のミット制の構造の中で、地域の民衆の組織、農村の組織、軍の組織がどのように繋がっていたの

のかということ明らかにした。さらに修士論文では、セルビアが近代国家を形成していく時に、地域社会が果たした役割について扱った。)

僕が日頃つねづね疑問に思っているのは、「東ヨーロッパ」もしくは「バルカン」という概念で、ギリシャ、トルコを外してしまうということです。アルバニアなんかも材料がないということで、実質的には外されているわけです。ブルガリア、ルーマニア、ユーゴスラヴィアを一体として論じることはあるわけですが、それは非常にイデオロギー的なものではないかというイメージがあります。つまり、戦後の社会主義ブロックであるという考え方に重なるわけで、NATOに加盟しているギリシャとトルコは別の地域としてはずしてしまう。そうすると、その地域の歴史を研究するという視点にとっては、かなり断絶ができるわけです。たとえば、『東欧関係文献目録』を見ても、ギリシャについては基本的な文献についても掲載されていないわけで、その辺をもう少し広く考えるべきではないかと思います。

自分の研究の問題点は、どうしても研究の領域が狭くなっていってしまうということです。それがために「セルビア中心主義」に陥ってしまう危険性があるわけです。実際、ヨーロッパ3国(英・仏・独)あるいは日本との比較で考えていくから、その地域がいかにも独自であるかと思いついて入っているけれども、それがもうちょっと他のアジア・アフリカの諸地域と比較していくと、類似した点がある。つまり、西ヨーロッパを中心に偏ったことの裏返しとして、「東欧史」を研究しているという、精神的な貧しさの系列があるのであって、自分としては今後、西ヨーロッパとか日本との比較という問題ではなくて、もっと地域的な広がりを考えながら、トルコ、中東、さらにはアフリカなどへと、広い範囲に目を向けて、研究をしていかないとまずいのではないかと思うわけです。

篠原 琢(1964年生れ：ボヘミアを研究対象にしたのは、「巨人ゴーレム」やカフカにあらわれるプラハへの漠然とした憧れ、エキゾチズムだと語る篠原だが、チェコ語の辞書を買ったときに、ようやくボヘミアで卒論を書こうと決心したという。研究対象は、ボヘミアの1848年革命である。卒業論文は都市知識人の「民族」運動、修士論文は、無産農民の動向である。48年革命における「民族」の意味とは何かを追っている。)

近代史の場合には、問題として「民族問題」、「民族」に対する関心というのがあって、僕の場合にもそれがあつた。もちろん、「民族」の問題というのは、個々の地域でそれぞれ独自の形で出てくるので、一般化することは出来ません。でも、近代世界の中で出来上がってきた「民族」というものが、将来的には、いつ、どういう形でかを別にして、出来上がってきたのと同様に、解消されるんじゃないかという見通しを立ててみたいと思います。現実の政治問題とは離れてですがね。解消されるという見通しの上に、「民族」の形成過程を見ようとする時に、世界史の中で最初にそれが問題になってきたのは、「東ヨーロッパ」、特にボヘミアの48年なんじゃないかな、というのは牽強附会ですけど、僕の研究のきっかけかもしれません。

48年革命そのものが、ボヘミアに限らず全体として、良知(力)さんがおっしゃるように、思想的、理念的な革命であつたわけです。これは二重の意味でいえるわけで、ボヘミアでは、民族の解放の問題とブルジョワ革命の問題—勿論、これは表裏一体のものとし

て出てきますが一なのであって、この大枠のもとに、革命の思想史的な位置付けを、実態研究で補強していくというのが、従来の研究史であったと言えます。つまり、「封建制から資本制への移行期」とか、あるいは「民族解放の記念碑」、「諸民族の春」としてですね。僕はむしろ、そこから抜け落ちていったものを研究することによって、48年革命自体の位置付けに挑戦していくことが出来るのではないかと考えて、農村の問題を扱ってみたいと思ったわけです。

ただ、どうしてもチェコ本国の研究に依存せざるを得ませんから、一番大きい問題点は本国の研究をどう扱うかということです。チェコスロヴァキア国家自体が、「民族」が存在するという仮定の上に成り立っている国家ですので、僕の扱っているテーマでは、非常にロマン主義的な民族観が根強く残っているように思います。それに加えて、チェコの場合は、周辺のポーランドやハンガリーに比べて、比較的マルクス・レーニン主義的な歴史見解が、公式見解としてはっきりアカデミーの中であって、それに乗った発展段階説を補強する形で、研究がなされてきたように思います。

それから、ボヘミアはプロイセン、ザクセン、バイエルンなどに囲まれていて、文化的にもかなり共有される部分が多いわけですが、それを総体として同じ土俵の上で扱う必要性がありますね。つまり、「東欧」という形で一括りにされた結果、周辺の類似した問題を持つ地域と、切り離されているんじゃないかな、と思います。

木村真（1960年生れ：大学の一般教養の西洋史の授業で、板垣雄三氏から、「東ヨーロッパ」の民族問題の講義を受けたことが、「民族」なり「民族問題」なりに関する問題関心のきっかけになったと語る木村だが、ブルガリアを始めたのは、本当に偶然だという。卒業論文は、青年トルコ革命から第一次大戦終結直後に至る時期の、ブルガリア農民同盟の外交方針、とくに近隣の「諸民族」との連邦構想を扱い、修士論文は、第一次大戦末期に、ブルガリアの軍隊が崩壊する過程で編成された反乱部隊のソフィア進攻事件を扱った。1989年秋にソフィアに留学。）

そもそも僕が、農民同盟に関心を持ったのも、この政党が19世紀末以来、形態とか機能とかを変えながら、今日まで存在している、共産党以外にもこういう組織が存在しつづけているということに魅かれたんです。ただ、研究をしていくには、先行研究との兼ね合いという面もあると思います。先行研究に広い視野を持つものがあつた場合には、それに刺激を受けることもあるだろうし、勇気づけられることもあるでしょうが、そうでない場合に、語学的な障害もあって、狭い方に流れるということがあると思います。ブルガリアの研究を見ると、一番多いのは、やはり共産党や社会民主党の党史とか、民族解放運動に関するものであって、それ以外の分野は傍流なんです。だから、僕のテーマは、本国でもパイオニア的な研究という部分があるんですね。ですから、本国の研究者と競うということにもなるわけです。

次のテーマとしては、バルカンのオスマン帝国統治下にあつた地域の農村に関心がありまして、そういう地域の史料を見ていきたいと思っています。これに関しては、ブルガリアでもあまり進んでいなくて、ソフィア近郊の農村などについて、統計史料とか、土地台帳などが編纂されていますが、全体としては遅れているわけです。

鈴木 広和（1959年生れ：ハンガリー中世史を研究するにいたったきっかけは、本当にただ何となくとしか言いようがない、と語る鈴木は、ただ何となくという答えでは納得しない相手には、高校の教科書には登場しないハンガリー王国が、歴史地図を眺めたら、実は意外と大きかったことに魅かれたからだ、と答えることにしているそうである。卒業論文では、紀元千年ごろにおけるハンガリー王国の建国の過程を分析し、修士論文では、ハンガリー人の王朝断絶のあと、シチリアから呼んだアンジュー朝の国王のもとで、分裂しかかっていた王国が再統合される過程を分析した。留学のため、ブダペストに出発する数日前の、彼にとっては慌ただしい中の座談会出席であった。）

最初に卒論を書いた時には、誰もやっていないからいいだろう、というのがあったんですが、やってみたら、誰もやっていないので困った、というところでした。最初は、ハンガリー語も知らないし、史料の取り寄せ方も知らない、というわけで、実感としては、研究書も史料もない、何も無いという感じでした。とりあえず、英語や、フランス語の研究を集めました、それだけでは何もできない。それでは、ということで、ようやくその段階でハンガリー語を勉強しました。ハンガリー語を教えてもらえるという状況はありましたが、それがなかったらやっていなかったと思います。

今となっては、金に糸目をつけなければ、史料をマイクロの形で、ハンガリーから取り寄せることができますし、新刊紹介に目を通せば、最新の研究書を手に入れることもできます。しかし、日本に先行研究がないということは、自分としては非常に辛かったですね。今でも辛いんですけど。卒論で選んだテーマについては、実はハンガリー本国でも、あまり研究が盛んではないんですね。かといって、他の国の研究者が、優れた研究をしているというわけでもない。しかも、史料がラテン語でそれも辛い、と。ですから、研究の物理的な条件という意味では、非常に整っていません。

何となく研究を始めて、修論を書いた今になって考えているのは、なぜ外から国王を連れてきて、王国が存続したのか、つまりハンガリー王国とは、あるいはただの王国でもいいんですが、何なのか、ということを追求していこうと、しかも、自分のできる範囲で、できることからやっていこうということです。

小沢 弘明（1958年生れ：今回の座談会出席者の中で最も研究歴の長い小沢は、自分はむしろ団塊の世代の発想に近いのかもしれないと語る。かたやファシズム、革命、社会主義に対する「素朴な」関心と、かたや中国や朝鮮に対する関心からくる、「被抑圧民族」への関心が、「東欧」地域の歴史研究に向かわせたのだそうである。卒業論文は、第一次大戦直後のチェコスロヴァキアの土地改革を、第二次大戦後の人民民主主義期の土地改革と比較しながら分析し、修士論文では、第一次大戦前のいわゆるオーストリア社会民主党の「民族」の問題を分析した。）

最初はドイツ革命期あたりを勉強しようかと思っていたんですが、ちょうどローザ・ルクセンブルクのヨギヘスへの手紙が翻訳された頃で、彼女はポーランドの出身ですから、ポーランドとはどういうところかという、個人的な関心がありました。それから、当時ようやく東ヨーロッパ関係の書物がぼつぼつと出始めた時で、たとえば、山川（出版社）の各国史の『東欧史（新版）』とか、矢田（俊隆）氏の『ハプスブルク帝国史研究』が出た

のもその頃でした。

では何故、「東欧」史の中のチェコスロヴァキアをやろうとしたかということ、それは偶然で、たまたま日本でチェコ語の文法書が出てきましたので、これならできそうかな、と。概ね、僕らのちょっと前の世代は、修士論文の段階でその地域の言葉を勉強するというのが普通だったのですが、ここ十年ぐらい、卒論の段階で既に勉強するというのが、当たり前になったわけで、そういう条件の問題があったと思います。ですから、ようやく僕らがやる頃に、ある程度関心を持てるような周辺的な事情や、それにその関心を研究という形で熟成させることのできる環境が整ってきたということが、その「偶然」という事情を説明するのではないかと思います。

ただ、僕の場合は、いわゆる「東欧」とか「東欧らしさ」から、いかに離れてきたかという話になってしまうかもしれません。その理由はほかにもあるんですが、ひとつは、80年にプラハに行ってみたというのがありまして、本屋には本がないし、図書館に行ってもいちいち面倒臭いし、68、9年に出た本は別室にあるというようなことも言われて、町の暗さも手伝って（笑）、ちょっと堪え難くなってきたんですね。それと、当時プラハに留学していた先輩に、「あなたは、ドイツ人の立場から見るのか、チェコ人の立場から見るのか」と問い詰められたことがあって、そういう風に言われると、私はどちらのナショナリストでもありません、と答えるしかないんですね。だから、最初は、「被抑圧民族」ということで、ドイツ人とチェコ人というかなり単純な関係を考えていたんですが、すでに卒論をやっていた段階でも、たとえばハンガリー革命との関係で見るとチェコ人というのは抑圧者であるし、もちろん、スロヴァキアとの関係でもそうである、と。

先ほど、バルカンではむしろ、アジアやアフリカとの共通性があるという話が出てきたけれども、僕は、チェコをやっていた所からくるのかもかもしれないけれども、やっぱりヨーロッパである、にもかかわらずヨーロッパであるということに注目しなくてはならないと思いますね。つまり、「被抑圧者」というような簡単なことでは割り切れないことが色々でてくる。それはもちろん、「重層的」ということなんでしょうが。その頃からだんだん、自分はやはり「被抑圧民族」の一員ではないし、「被抑圧民族の立場に立って」というようなことはとても言えない。むしろ、言ってみれば「抑圧民族」の立場から反省するという方向を採った方がいいんじゃないか、という気がしてきたんですね。もちろんそれは、一歩間違えると居直るということにもなるし、あるいは逆に、団塊の世代の研究者の中にもそういう人が多いんじゃないかと僕は密かに思っているんだけど、懺悔するというパターンですね、自分たちはいかにひどかったかという話だけで終わる。そうではなくて、その間の微妙なところで、自分のものの見方を作っていかなきゃいけないんじゃないかという感覚が、次第に出てきたんですね。ですから、だんだん「チェコ人の立場に立って」というような考え方から離脱したわけです。

もちろん研究の方でいえば、社会主義運動と民族といったものを考えていく時には、階級と民族の関係というものが念頭にはあったんですけども。先ほど、「民族」が形成されてくると同様に、「民族」が解消されるという話があったんだけど、僕は「民族の問題」は解消される、と言った方がいいんじゃないかという気がしますね。「民族」が解消されるかどうかというのは、また別の問題であって。僕はむしろ、「民族の問題」がどういう風に解消されるかという、そこをやろうかと考えていたわけですけども。

司会：皆さんしきりに、研究を始められたきっかけについて、「偶然」を強調していらっしゃるんですが、なぜ「東欧史」研究を志す人たちが層をなして登場してきたか、という最初の課題につきまして、皆さんのお話をうかがった上で、私なりに整理してみますと、一つは小沢さんが言われたように、研究をやってそれが形になるというだけの、外堀というか、予備的なものが整った、あるいは整いつつあったという状況を指摘できるのではないかと思います。

もう一つは、皆さんの共通の課題、関心が、「民族」の問題にあるということですね。しかも、そこでいう「民族」というのは、総じて「被抑圧的」な存在であるということが、重要なのではないかと思います。勿論、「被抑圧的な民族」というのは、東欧だけの問題ではないけれども、たまたま「西洋史」という枠で言うと、「東欧」ということになるのかもしれませんが、また、「被抑圧的」なるものを対象とするという意味では、イギリスやフランスの民衆史を研究する人たちと、関心を共有していると言えるのかもしれませんが。そこで、次の話題として、「東欧」における「民族」という問題について、話し合っていきたいと思います。先ほど、小沢さんは「被抑圧民族の立場」なぞに、軽々しく立てるものではない、ということをおっしゃいましたが、小沢さんの「民族の問題」に関するイメージから、もう一度お話しただけですか。

「東欧」における「民族」

小沢：僕も最初は、「民族問題」という風に考えていたわけだけれども、だんだん「民族問題」という言葉使いもやめたい、と考えてきて、最初の論文では表題にも「民族問題」というのをつけたんですけれども、その後は「民族問題」という言葉はひとつも出てこない形でものを書いています。抑圧されたものの立場に立つということで、しかも重層的だということになると、だんだん居心地が悪くなるわけですね。それをどんどん突き詰めていくと、世界で最も抑圧された民族の立場に立つ、というのが探せれば、一番気が楽なんです。

佐原：パレスティナじゃないですか。

小沢：ま、パレスティナというのも、いいかもしれないけれども。そこから見る、という方向というのもありえますよね。悲惨探しというか（笑）。

佐原：たとえばアルメニアは、長い時間、国家を形成した経験があって、パレスティナはまた別個ですね。もう一つ、この辺りにはクルドというのがある、クルドの場合だと、一般に言われているようなナショナリティ概念では、捉えられないんじゃないかと思えます。ですから、「民族」というのがそれ程、実体的なものになっているのかどうか、ということがまた一つ問題だし、一番鍵になるのは、レーニン＝ウィルソンの「民族国家」という概念が、国際法的に適用されてしまうということにあるんじゃないかと思うんです。

小沢：それはそうですね。「民族国家」と言うか「国民国家」と言うかはともかく、

〇〇人の国という形で、簡単に言ってしまうような状況に対しては、そもそも東欧史をやるように考える人はみんな、そういう感覚はおかしいんだという所から出発したんだと思うんですね。ただ、それはいいんですが、逆にそうすると、西ヨーロッパは国民国家であって、東ヨーロッパはそうではなくて、中東になるとさらに遠うと、きれいに分けちゃう考え方に取り込まれる恐れもあるんですね。西ヨーロッパ・イメージ自体が変わってきていることは、日本の研究状況からも明らかだし、既存の「西ヨーロッパ」というものを自分で勝手に作り上げて、それとの対比の上で、東ヨーロッパの特色を語るができなくなってきたりするんですね。

佐原：日本的な考え方というか、いわゆる天皇制国家観であるとかが、ある時期まで研究者の上に影を落としていて、しかもレーニン主義の影響が強かったりしたものだから、民族自決論を全面的に擁護するというトーンがあったりするわけでしょう。その影響を、日本の研究者が、最も遅くまで引きずっていたような気がするんですがね、どうでしょうか。

篠原：たとえば労働者階級とか、農民階級という言葉は、それ自体が分析の対象であって、その内実を問う作業が始められているし、行なわれている。それに対して、チェコ人とかスロヴァキア人という言葉は、非常に無批判に分析概念として使われたりするわけです。〇〇人という言葉がそれ自体、分析の対象であるべきなんですが。

佐原：それはチェコだからじゃないですか（笑）。ユーゴスラヴィアの場合でも、スロヴェニアやクロアチアは、民族国家という面が強いけれども、セルビアになると非常に複雑ですよ。ボスニアやさらにはコンヴォを抱えていますから。だから、ユーゴのヒストリオグラフィーでは、かたやナショナリスティックなものもあるけれども、かたや「民族」なり「ナロード」といったものを、デリケートに扱っていかうとする傾向もあるんですね。たとえば、「ユーゴスラヴィア史」には、決定版というものがないんですね。かつて、1960年代に、『ユーゴスラヴィア史』というものが作られて、それに対して、セルビア中心主義であるという批判がかなり出てくるんです。たとえば、ボスニアのムスリムとか、クロアチア、スロヴェニアなどから批判が出るわけです。しかし、それを読んでみると、これがそんなにセルビア中心主義なのかなあと、自分では不思議に思っています。アメリカで出ている、『近代セルビアの歴史』なんて本があるけれど、無茶苦茶なセルビア・ナショナリストが書いているわけです。それに比べれば、はるかにトーンを落としているのに、批判されている。ですから、僕は、篠原君の言うような、「チェコ民族主義」であるとか、「確固たる実体を備えた民族」とか……

篠原：いやいや、実体がないにもかかわらず、無批判に分析概念として使っている研究が、結構多いんじゃないかということです。一定のイメージのようなものは湧くんですけども、何も実体を備えていない分析概念として使われているんじゃないかと。

小沢：言ってみれば、東欧史というのは、一番最初の段階においては、ドイツ史をや

っていた人が視野を拡大したり、ロシア史をやっている人が地域的にも大きく見てみるということから始まったわけです。それが、次の段階から、自分のやろうとする地域にパラシュートで降りたんですよね。そうすると、前の世代が持っていたメリットとデメリットと、直接パラシュートで降りた場合のメリットとデメリットがそれぞれあるように思うんですね。その場合の一番の問題点というのは、僕は、アジアにもたれかかっているということだと思っただけです。つまり、国家はその「民族」によって作られていくべきものであるとか、「被抑圧民族」であるとかいった捉え方で、大国を批判する、あるいはアジアから見てヨーロッパを批判するというようなことです。そういう論理を、「東欧史」研究でも使っているということですね。

佐原：それは、各国の民族解放史観に、日本の研究者が引きずられている、ということですね。最近出た、山川出版社の『現代世界と民族』でも、バラバラといえればバラバラなようできて、やはり「民族」というのは国家を形成すべきであるという思想があるように感じます。これに対して、H. シートン・ワトソンは、民族と国家というのは、そもそも分けなければいけない、ということを繰り返し言っていて、「民族」の扱いとか、「民族自決主義」に対する批判というものが、かなり強いんですね。その提起を受け取らない日本の研究者も少なくない、というのが問題ですよ。東欧というと、「民族」が複雑に入りこんで住んでいると言われるけれども、中東ほどモザイクにはなっていないですね。オスマン史の枠組みで考えていくと、バルカン半島は「トルコ人」以外の「民族」がそれなりに住んでいるけれども、それは比較的コンパクトに住んでいるんですね。コンパクトに住んでいるから、たとえばセルビア人の土地とか、ブルガリア人の土地みたいな言い方ができるんだらうけれども、それに対して、中東、たとえば歴史的な大シリアなんていうところになると、アラブ人が多いわけだけれども、他のマイノリティーもそれなりに共存しているんですね。それを考えると、「民族」は国家を作るというのがおかしい、となるんでしょうけれども、コンパクトに住んでいる地域を研究してしまうと、これが普通なんだということになるんでしょうね。

木村：全体としては、そういうイメージになるんでしょうけれども、中東だけでなく、バルカンであっても、文献なり、史料なりに依拠して、本当にそう言えるかということ、僕なんか、自信を持ってそこまで言えない、というところがあるけれどね。

佐原：こうやって話していくと、どんどん深みにはまっていきますね（笑）。最近、いくつか刺激的な研究があって、たとえば『想像の共同体』とかですね。あれなんかをはじめとして、「民族」というものが所与的な一体を形成すべきであるという、「民族国家」の理念に対する疑念というのは、もう自明のものでしょ。

小沢：板垣さんの考え方が出てからは、単純には言えないということは、本来的にはわかっているはずなだけだけれども。

「東欧」史研究の共通の枠組み

佐原：唐突かもしれませんが、共通の枠を建てて、研究会を作ったりするわけなんですけれども、それで何か共通の成果を出せる枠組みになるか、という話題に移りたいんですけれども。

篠原：研究会に来る人たちの共通の課題というより、悩みというか、みんなを共通にまとめているものは、いわく史料が手に入れにくい、本が手に入れにくい、言葉が難しい、他に誰もやっていない（笑）。

佐原：でもそれなら、北欧とか、アフリカとか、結局みんな同じことになるよね。

小沢：でも、最初の段階は、やはり弱い者は結束しないと立ち向えないから（笑）。最初はそういうことで始まるのが普通だと思うんですよ。ただ問題は、所帯がかなり大きくなってから、分家するとか、家出するとか、色々な人が出てくるのは当たり前のことで、むしろ、最初は何かしらのものに対抗して枠を作るということをやってたわけだけでも、今度はそういうものを色々な形で外していくというのが、まともなことだと思うんですよ。だから、先ほども出たように、「東欧」という時にギリシャとかオスマン帝国とかトルコとかを入れないで考えてしまう、あるいは研究対象まで「民族」単位で固まってしまう、ということになるとまずいですよね。たぶん、中世史をやっている人の目から見たら、「民族史」という形で見るとよりも、むしろ「ヨーロッパ」史とかヨーロッパ史と言いつけるのも問題かもしれないけれども—という単位で考えた方がいいんだろうし、自分で対象とする地域のとり方をいろいろと変えていった方が面白いと思うんですよ。

司会：東欧史という括り方自体が便宜でしかないんじゃないでしょうか。研究会が肥大してくると、研究会としてのアイデンティティというようなものに、逆に研究者自身が囚われて、それによって東欧というものを実体化してしまうという面があるのではないかと。「東欧」というのが、「西欧」の裏返しとして規定されたものでしかないんであって、「西欧」というものを先ず想定した上での「東欧」でしかない、にもかかわらず。

佐原：いや、そうでもないんじゃないですかね。アメリカの東欧史研究は、45年以降、急速に蓄積されていくわけですけど、そこで基本的なプロブレマティックになるのは、ソ連の傘下にあるヨーロッパということですよ。社会主義の一つの連合体としての東欧というものが、実体としてあると想定した研究だったんじゃないかと思うんですよ。当然それだったら、ギリシャは東欧に入っていないし、ユーゴスラヴィアも別個に扱われてしまうというわけで、すごくイデオロギー的だと思うんですよ。

もう一つは、ソ連のヒストリオグラフィーも重要ではないかと思います。ソ連のヒストリオグラフィーは、最初はスラヴ学として出てきて、それにルーマニアとハンガリーを加えて、今の東南ヨーロッパの研究というものが出来てきたんですね。この二つは圧倒的に力が大きいし、ここで出されたパラダイムにどうしても引きずられてしまっているような気がするんですよ。それを、日本としての視点から捉えたとすれば、ある所ですけれども

当然いいわけですし、もしくは積極的に壊していかなければならないことかもしれないんですね。

司会：いま指摘された、戦後の社会主義とスラヴ学という問題とともに、もう一つ、東欧というものの規定の外在性という問題ですが、もし、東欧をドイツとロシアの狭間にある地域として捉えるならば、「バルカン」と「Mittel Europa」という風に大きく分けられるのかもしれない、と思うんですが、この両者は現在皆さんの中で、どのように捉えられているのでしょうか。

佐原：バルカンという概念が使われるようになるのは19世紀の初め頃とも言われているんですが、一般に利用されるようになるのが19世紀の末から20世紀の初めにかけてなんです。それからバルカノロジーという学問が成立するのは、第一次世界戦争以降なんです。セルビアのヨヴァン・ツヴィッチあたりから、一つの地域であるという地域研究が進んだんですが、これは、セルビアから始まったというところが、非常に意味のあることだと思うんですね。

木村：それと似たことが、ルーマニアのニコラエ・ヨルガの場合にもあるわけですね。

佐原：文献リストなどから見ると、ドイツのほうで東ヨーロッパ史というものを捉えるのは、やはり19世紀の末になるみたいですね。

篠原：それは、例の「生存圏」の問題と関わると思うんですけど。つまり、ドイツ人のLebensraumとしての「東欧」ないし「中東欧」という意味での研究は、第一次大戦の前から多いんじゃないでしょうか。

佐原：そういう流れは、現在はどうなっているのでしょうか。

篠原：どうでしょうね。中東欧に関して一つ言えば、第二次大戦後に追放されて、西独に移住したドイツ系の人々を中心とする研究、これが有力な流れとしてあると思います。ただ勿論それは、政治的に国境を回復しようとする運動と直接に結びついているわけでは全然ないけれども、戦後に数百万の単位でやってきた「被追放者」たちの、自分たちの「故郷（ハイマート）」を研究するという在り方が、非常に有力だと思います。

佐原：「故郷」を研究するとなると、一國史の研究になりますよね。「東欧研究」のように、一つのパースペクティブでまとめる方向が、未だにあるのかということですね。昔、あったのかどうかもわかりませんが。

小沢：英語でもドイツ語でもそうだけれども、中東欧と南東欧というのは分けますね。「南東欧史研究所」というのはあるけれども、中東欧に関しては、ドイツ語圏なんて、自分の所だと思っているから（笑）、とりたててそういう括り方はしない。

佐原：南東欧というと、やはり旧オスマン領のヨーロッパということになりますか。

鈴木：ハンガリーが入ることもありますね。

篠原：それと、中東欧の場合は、「ヨーロッパ性」の強調というものは確実に存在していますね。

小沢：三木亘氏だったかが書いていたけれども、ギリシャ人はたとえばパリに行く時に、「ヨーロッパ」に行くという発言をするというんですよね。つまり、ギリシャ人は、自分が「ヨーロッパ」という感覚ではないんですよね。おそらくチェコ人は、自分のことを西ヨーロッパに属すると思っているし、そう発言するわけですよね。だから、その辺の感覚の違いというのが、既にそこに住んでいる人たちの間にあるわけで、それを何かしらのもので括っちゃうというのが、やりにくいことだと思うんですけどね。

佐原：自分たちの歴史観を養成するものが、歴史叙述ですよ。ヒストリオグラフィーの中で、ヨーロッパ史の一員として、自分を描いていけば、ヨーロッパの歴史に綿々と繋がる自分たちという意識をもつでしょうし、バルカンの場合は、五百年に及ぶオスマン支配に寸断されているし、それ以前からヨーロッパであったかどうか、わからないし。まあ、彼らも、ヨーロッパの一員であるというイメージは、当然持っているでしょうが。ボスポラスの西側にいますから。ただそれが、西ヨーロッパとは違うということになるかもしれない。ヒストリオグラフィーをある程度研究していくことによって—これは難しいことですけども—認識の問題性とか、今後の方向性がわかってくるかも知れませんね。

司会：先ほど、ドイツ語圏の「南東欧史研究所」の研究対象の中に、ハンガリーが入るということでしたけれども、ということは、ハンガリーはオリエンタルだという認識があるんじゃないでしょうか（笑）。

鈴木：ハンガリー人は、自分たちの国はヨーロッパの真ん中にある非常に大切な土地だと言いますね。

佐原：僕の出会った少数のハンガリー人は、皆自分たちはアジア人である、と言いましたが。

篠原：それは、相手が日本人だからだよ（笑）。それはともかく、歴史研究の場合で言えば、チェコの「民族復興期」に「民族」のアイデンティティを確定しようとした知識人にとっては、フス戦争がその一つの中心にあったと思うんですけども、フス戦争というのは、一方では宗教改革の先駆けとして捉えられている、つまり、ヨーロッパの近代の幕開けとして評価しようというわけですから、チェコ人のアイデンティティを獲得しようとした時に、既に「ヨーロッパ」というのが前提になっていたと考えられますね。その点

では、バルカンとは全然違うのかもしれませんが。

佐原：でも、一方では、チェコはスラヴ学の発祥の地であって、ゲルマンに対立するスラヴという考え方が強いのではないかと思います。

篠原：その意味で面白いのは、チェコのスラヴィズムには、むしろスラヴ人の中にこそ、ヨーロッパ的価値、たとえばフマニズムとか、民主主義とか、自由、調和といった理念がより体现されているという考え方があるというんですね。つまり、スラヴ人の独自性を強調する一方で、いわゆるヨーロッパ的な価値を体现するものとして、これを捉えていたように思われますね。だから、ロシア的なスラヴィズムとは、一線を画しているような気がします。

佐原：1919年にワルシャワで、最初の「東欧」歴史家会議が開かれて、その辺から、「東欧史」というものがアカデミズムの世界に作られていった、ということ、有斐閣選書の『概説東欧史』に鳥山（成人）さんが書いてましたが、そのくらい新しい概念なんですね。第二次世界戦争後でも、社会主義のイデオロギーのもとに「東欧」が一致団結していく、という枠組みで捉えられてきたわけですけど、現在の「東欧」諸国の動向を見ていくと、その対象自体が解体していく傾向を持っているという感じがするわけで、だんだん「東欧史」という枠組み自体が、統制が無くなっていくということもあり得るんじゃないかと思うんですね。アカデミーの内部では、制度として「東欧史」という講座ができちゃえば、残るでしょうけれども、現実の「東ヨーロッパ」と言われている地域が、今後変わっていけば、それを認識するあり方も、また再検討しなければならないことも出てくるかもしれませんね。

篠原：そうすると、先ほどのヒストリオグラフィーの問題で言えば、日本の中で、「東欧史」という枠で、一つの研究会にまとまっているということの意味があるかということですね。

佐原：この前、南塚（信吾）という人が言っていたのは、東欧史研究会も最初はそれなりに、みんなが集まって討議する場が出来ていたんですが、最近ではポーランドの研究者が発表する時は、ポーランド研究者しか集まらない、チェコの時もチェコ関係者しか集まらない、という傾向が強くて、全員が同じ話題について討議する場にならない、これは問題である、ということでした。

小沢：僕も、最初のうちはとにかく全部、出るだけ出ようということだったんですが、だんだん分科会みたいな形になって行って、それぞれがサークル化して、全体の研究会ではあらたまったことしか発言できない、という雰囲気になりました。あまりの分科会の多さに、体が保たなくなっていて、そのうち出られなくなった、というわけで。僕自身、分科会を主催していた時期もあったんだけど、固定した分科会でなければいいと思いますね。分科会の活動ばかりになると、「東欧史」研究会というのが存在意義があるのか、という問

題になってくるのかもしれませんが。まあ、みんなが止めようというまでは、存在していてもいいんじゃないかという（笑）、そんな感覚ですけど。

篠原：一番最初に、研究会に行ったときに思ったんですけども、たとえば、ポーランドの教育史を扱った報告があったとすると、報告の後の討論が、「ハンガリーでは」とか、「チェコでは」とか、それぞれ自分の研究地域の例を言うだけで、議論が噛みあわないんですね。つまり、自分の対象地域に、仏教の言葉でいう「執着（シュウジャク）」が生まれて（笑）、特殊性を強調しすぎるくらいがあるんですね。「東欧史」ということでは成り立たないにしても、「南東欧」と「中東欧」でもいいし、あるいは別のカテゴリーがあるかもしれないけれども、ともかく一国史—一国史というのもフィクショナルなものですから—から離れて、共通の課題が探れば良いと思うんですね。

初期の、第一世代の人たちの「東欧」認識が、言わば「十把一絡げ」的なもので、次の「パラシュートで降りてきた」人たちが、個別性、特殊性をそれぞれ強調するとしたら、次にやって来るものは、一回バラバラにしたものを何らかの枠組みでまとめていくような作業なんじゃないでしょうか。

司会：ということは、やはり「東欧」というまとまりがありうるか、ということになりますね。

佐原：時代、時系列を離れて「東欧」という概念が成り立つかということ、これは無理な相談ですよ。僕のやっている19世紀中葉以前を見れば、あまり交流がなくて別個の地域社会なんですからね。かたやイスラム国家論の領域で捉えられるような政治体制であったところと、オーストリア、さらにはロシア領に入っている地域となると、ずれて当たり前なんです。

1918年以降に独立国家が出来て、たとえば農業恐慌なんていう問題は共通の課題であったといえるし、西ヨーロッパと革命ロシアの狭間にあって、新興国が抱える問題には共通性があったろうし、ということで、一まとめにできる枠組みが成り立ちえたわけです。その後、45年以降、48年を経て、成り立つ枠組みが変わってきて、そして現在があるというわけで、時間的に分けていかないと、一絡げになってしまうんですね。

木村：たとえば、アメリカのワシントン大学の研究シリーズは、題名は「東部・中央ヨーロッパ史」という名称だけれども、実際には、分割ポーランドで一冊、19世紀バルカンのナショナリズムで一冊、戦間期に関しては「東・中央ヨーロッパの戦間期」で一冊という具合です。山川の各国史の「東欧史」は、確かに「昔から今まで」ということで扱っているわけですけども、そういう切り方では無理があるのは当然ですよ。けれども、外から見たらやはり「東欧史」ということになるわけですよ。

司会：それは、オーディエンスの問題になるんじゃないでしょうか。つまり、誰を対象に何を書くかということですね。もし仮に、パイオニアの人たちが概説を書く時期を第一期、個別対象についての総論的な研究を第二期とするならば、日本における「東欧史」

の現状は、おそらく第一期が終わって、第二期の最中にあるのではないかと、思います。それでは、第三期として何があり得るのか。個別の中の更に細かい問題に向って掘り下げていくのか、それとも別の道を模索するのか、ということで、話題を今後の展望という方向に移していきたいと、思います。

「東欧史」研究の展望

佐原：僕の考えでは、各国史すら書けないというのが現状なんですね。ユーゴやポーランドは、比較的研究者が多いけれども、ブルガリアなどは少ないという、国ごとにバラツキは大きいんですが、ただ、東欧史研究会が存在しているというのは、勿論、便宜的な枠で、その枠組みは疑わなければならないにしても、各国史に集中してしまっただけで、最初に出た民族の問題などは全く捉えられないわけですから、ある程度出来る範囲で共通テーマをしぼって、常に枠組みを疑いつつ、共同研究をするという方向性はあり得るでしょうね。

小沢：問題は、「共同研究」といった場合の、共同研究のありかたじゃないでしょうか。それこそ、お互いに自分のやっている所と、相手のやっているところが、どうも似たような時代であっても、状況が違うらしい、と、いって差異を確認して安心するとか、あるいは共通性を確認して安心するということじゃなくて、本当の意味での共同研究をやっていくというのは、かなり困難なことだし、「東欧史」だけの問題じゃないですね。むしろ僕は、積極的に共同研究を組織していこうというよりも、個々人が自分の研究の中で、イデオロギー的な枠組み—たとえば先ほどのアメリカにおける切り方—とは違った、自分の切り方をそれぞれ出していくしか、さしあたりないんじゃないかと思えますけどね。それを無理遣い、「東欧史」としてまとめてどうこうするという段階には、まだまだ行かないと思えますね。

佐原：結論としては、現在の研究の蓄積がない、ということですね（笑）。

鈴木：それは結論というか、始まりというか。これは僻みではないんだけど、近い時代をやっている人たちが、互いに自分の研究上の話をしながら安心しているように見えるんですけど、あれは何らかの共通の枠組みということにはならないんですか。

木村：どうでしょうね。南東欧というか、バルカン半島の地域内であっても、たとえば農村共同体のあり方という点でも、サハラの研究しているセルビアやボスニアと、ブルガリアの間にも、随分違いはあるわけで、共通の部分を確認して安心しているということではないと思えますが。

佐原：鈴木さんの言いたいのは、アカデミシヤンのコミュニティーが存在することですよ。

鈴木：そういうわけじゃないけど。これはもしかすると、単なる僻みかもしれないけど

どね。俺は一人疎外されているという（笑）。

佐原：同じ研究会に、およそ自分の知り得ないことをやっている人がいて、非常に参考になるということがありますから、色々な地域の研究者が集まる場は必要だと思うんですね。ただ、先ほどから言いたかったのは、「東欧史」と分けてしまうと、ロシア研究者は来ないとか、中東研究者は来ないとか、ということになってしまって、変な閉塞性を持ってしまう。さらに、研究会内部での各国主義的な傾向があるから、内部でも人的な交流が無くなることによって、非常に無意味な枠組みだけが残って、得るものが少なくなる、ということを感じなければならぬんじゃないかと思います。

司会：それは、日本の「西洋史」、あるいは外国史学の抱える大きな問題点だと思いますね。研究の個別分化、本国における研究に伍した研究を目指すという方向性があるから、自分のやっていくことがどんどん狭くなる、それによって他の研究者とのコミュニケーションが無くなっていく、他地域の研究を自分の研究にフィード・バックさせようとしなくて、という一般的な傾向があると思います。逆に言えば、だからこそ「東欧史」というのは、そういうものをクロスさせる場になるのかもしれないですね。

篠原：たとえば、19世紀をやるんであったら、現在の国家の枠というのは、ほとんど意味をなさないわけですよ。ただ、たとえば僕は農村問題をやろうとしているわけですが、旧ハプスブルク帝国領のオーストリア、チェコ、ガリツィアを共通に論じようとしても、なかなか困難である、と。つまり、ガリツィア地域の研究については、おそらくポーランドで出ているだろうけれども、言葉の問題もあって僕は解らない、ということですね。本国の研究においても、ハプスブルク帝国の西半分を共通のものとして論じるようなものが、少ないんですね。留学した場合でも、たとえばプラハに留学したとして、しばしば国境を越えてウィーンに行かなければならない、とか。ですから、現在の国家の枠組みに、研究も視点も縛られてしまう、ということじゃないかと思うんですね。特に、「東ヨーロッパ」と言われる地域では、ハプスブルク帝国は解体しているし、国境線も何回も引き直されている、ということですから。

鈴木：確かにそれはそうだけれど、そこをなんとかしようという意識をもっていないとね。

司会：それから、「東欧」の場合には、留学が比較的容易に出来るから、留学すると国家の枠、国家のヒストリオグラフィーの枠の中に、はまりやすいということがあるから、留学する時に気を付けなければいけないことなのでしょうね。

小沢：昔、ロシア史の人から、「東欧史」をやっている人は何のために留学するんでしょうね、と言われたことがあって、つまり、行って、半分遊んでですね（笑）、ちょこちょこ本を集めて、帰ってきてちょこちょこ論文書いて、だと。逆に言えば、行けなくても出来ることがあるはずなんですね。

佐原：先ほど、個別領域に専門化してしまう傾向と、ジェネラル・リーディングに向かってしまう傾向とに、分化しつつあるという指摘がありました。これ自体はグランド・セオリー不在が、大きいんじゃないかと思います。戦後、「世界史」ということがユートピア的に言われていたり、たとえば大塚久雄の西洋経済史にしても、研究を分担して個別研究をやっている、「最後は大塚先生の理論でまとまるんだ」という安心感がある限り、孤立感に陥らない。ところが、今の日本の場合、そういうグランド・セオリーがないから—もしくはあっても仕方ないとも思うんですが—個別に純化していくと、そのままどこまでも進んでいってしまって（笑）、収斂しないし、かといって、一般的な読者に向けて、翻訳調のものを出すことだけをやっているとも仕方ない。グランド・セオリーという話ならば、最近流行っている—廃れてきたと言ったほうがいいかもしれないけれども—「ペリフェリー論」というのがあって、資本主義システムのペリフェリーということで地域史研究を進めていくと、共通の枠組みになりうるかどうか、という話になるわけですが、僕は、これなんかによってある程度何かが見えるのかな、とも思うんですが。

小沢：でもね、そういう風に考えていくと、最後の最後の所では、南塚、木戸（翁）、百瀬（宏）の諸氏がまとめてくれると思っているとか（爆笑）、あるいはペリフェリーということで色々やっていると、最終的には柴田（三千雄）さんがまとめてくれるとか（笑）そういう他力本願的なことにならないかな。

佐原：論理の枠組みがペリフェリー論の中で捉えられる視角というものが、東欧全体に波及してくる可能性があるわけですね。東欧は最初のペリフェリーであると、僕は思いますから、そういう面で、東欧は一つだと考えることになるんでしょうか。

木村：そう考えると、北欧なり、南欧なりとも繋げることができるわけですね。

「西洋史」における「東欧史」研究の意義

司会：そもそも「西洋史」という枠組み自体が、かつてはそれなりに意味があったかもしれないけれども、今や便宜的なものになっているということは、構成員自身が自覚しているわけですね。ところが、組織的な枠が一旦出来上がってしまうと、たとえば日頃の研究上の付き合いにしても、その枠に囚われてしまうということがあるわけですね。一方、近現代史研究者を中心に、研究会というのがもう一つの研究上の付き合いの場であるわけですが、それはイギリス史とかイタリア史とかのように、地域ないし国家の枠が軸になっていますね。これは、「西洋史」というのが解体した後に、地域研究が残された道になっているということではないかと。しかし、「東欧史」研究会というのは、地域をベースにしているけれども、いわば「西洋史」のミニ・サイズみたいなところがあって、その地域内の多様性が大きいわけですね。そういう意味で、「東欧史研究」には頑張ってほしいし、皆さんが「東欧史」に関心を持つのも、そういう所にあるのかと、というのはこじつけですが。ところが、東欧史研究会自体が、会員の関心が内向きになってしまって、ポーランドの報告の時には、ポーランド関係の人しかこないとかじゃ。それでは、半年に一回のポーランド史研究会とか・・・

鈴木：いや、半年に六度くらいあるかもしれない（笑）。

司会：ともかく、そういう形になってしまっているのでは、東欧史研究会の存在意義があるのだろうか。

小沢：ただ、「東欧」史でも、各国史とか世界現代史とかのパターンでやると、やはり国ごとの国家史という形になるわけですね。ポーランドなら一冊書けるけれども、ほかは二つ組合せて一冊とか、バルカンは一冊とかですね。でも、もっと色々な地域の組み替えというのが可能だし、たとえば、ラテン・アメリカにしても「ラテン・アメリカ史」というので本当に書けるかどうかは問題で、アンデス地域とか、ラプラタ地域とか、そういう地域設定の方が、より理解しやすいということが当然あるわけですね。だから、逆に聞きたいのは、「東欧」と括ってやらなければわからないっていうことが、あるんですかね。

篠原：素朴なことですが、「東欧」史の場合は、ラテン・アメリカと比べれば一番はっきりすると思うんですが、やはり「バベルの塔」であって、研究が共有できないということが大きいと思うんですね。言葉が全然違うから。たとえば、ベレント・ティボル・イヴァンが大きな本を書いても、英訳でも出なければ僕には読めないとかですね。

佐原：ある概念であるとか、ある課題を追求していこうという姿勢・方向性を持っているのに、メティエとしての些末な語学力にこだわっていると、チェコの民族主義者になるだけではないですか。

篠原：些末な問題ではないと思うよ。多くの言葉ができれば、自分の対象地域と同じような問題を持った地域の研究を、共有することができるんだけどね。

小沢：逆に言えば、言葉別とか国別になっているのは、共通の課題とか、グランド・セオリーとか、そういうものが見えにくいというか、たとえばファシズム研究という形で共同研究をやることは可能だけれども、そのレベルで既に問題意識の拡散が出てくるからですね。本来的には、僕も言葉の問題は本質的ではないと思うんだけど、課題の段階で共通性が見出だせない、という状況があるような気がするんですね。

司会：だから、一番危惧するのは、本国の研究史に吸収されていって、個別分化したものをチマチマとやる研究が、たくさん出てくるということですね。そうになると、たとえば「東欧史研究会」というのは、解消ですね。結局それは、「西洋史」研究がそういう状況に陥っているということと平行だということですね。ただ、先ほども言ったように、東欧史研究会は他の研究会と違って、一つの国家を対象にしたものではないわけですね。他の研究会では、いくら今「国民国家」の在り方が問題にされているといっても、結局「国民国家」なるものを実体化するような力学が働いているんじゃないかと思います。そういう意味では、東欧史研究会はそういう力学を解体していく場でありうるんじゃない

かと。ところが、実際に研究をしている人たちが、先ほどから言われているような状態になっていくと、意味がないんじゃないですかね。それなら、みんなで、せいぜいポーランド史研究会でも作ってもらったほうがいいんじゃないかと思いますね。

佐原：東欧史研究会の最初の世代、つまり南塚さんとか、宮島（直機）さんとか、羽場（久壽子）さんとか、あるいは江口（朴郎）さんとかを入れてもいいかも知れませんが・・・

司会：全然、世代が違うな。 **小沢**：親子だよ（笑）。

佐原：ともかく、旧世代はまだ何もなかったが故に、一つにまとめて考えていけるものがあつたし、それ自体にも、支配力とか、規定力のようなものがまだあつたのでしよう。ところが、次の世代はなかなかその域にまで達しないということもあるんだけど、問題意識自体を共有しきれていないという未熟さがあるんですよね。これは、ある時に、研究会内部で徹底的に討論しなければならないことではようね。

小沢：僕は、「東欧史」らしさとか、「東欧」的というのは、あまり関心がなくて、大歴史家にやってもらえばいいという感じだなあ。西洋史が、西ヨーロッパとか大国中心的な歴史学であつた、ということ打ち破るだけなら、なにも「東ヨーロッパ」でなくてもいいわけだし、現代史でもオランダ史とか、ポルトガル史がもう少しでもいいわけですね。そういう意味では、本来的には色々な地域をやっている研究者がいてもいい状況の中で、たまたま「東ヨーロッパ」が、ある程度研究をできる条件が出来つつあつたということで、少し研究者が増えてきたということですね。だから、「民族」の問題に対する関心でも、今であれば、もう少し別の地域であっても、つまり「東欧」でなくてもいいと、僕は思いますね。

司会：「西洋史」を選択するというのは、やはり「ヨーロッパ」というものに対するあるイメージが、我々の中にあるということではようかね。

小沢：だから、にもかかわらず、「ヨーロッパ」をやっているのは何故かということに、もしかしたら課題というものがあるのかもしれないね。それこそ、「民族」ということだけであれば、ヨーロッパをやる必然性は何もないわけであつて、他の方がもっとクリアな、あるいは深刻な問題かもしれない。

司会：そうですね。「ヨーロッパ」をやっている我々の精神構造の問題ですね。だけど、それは逆に言えば、だからヨーロッパをやらないんだということと、メダルの裏表というところもありますね。

小沢：現代歴史学においては、ヨーロッパ史をやっていると居心地が悪いわけですね（笑）。「新しい歴史学」だとかね。にもかかわらず、ヨーロッパ史をやっているとこ

ろで、何かしらの意味付けを持たなければいけないということで、逆に言えば、ヨーロッパ内のアジアとか半アジアといった存在を見つけるという、良知（力）さんが言うような言葉に、一つの慰めを見出だしている側面はあるような気がしますね。ただそれだと、アジア史の人から見れば、一体何をやっているんだということになっちゃうかもしれませんね。もし、そういうことであれば、「本物の」アジアをやればいいんであって、何でヨーロッパをやるんだ、ということですね。

佐原：近代日本の歴史学というのは、ヨーロッパがここまで雛型であったわけだから、日本人の精神構造では、脱亜というのが先に立つでしょうからね。そういうカルチャーを担って生きてきているわけだから、ヨーロッパに対して、まず思い入れがあるわけですよ。もっとも、「ヨーロッパ」と「アジア」という二分法自体が、とても古いものを引きずっているんでしょうけどね。

司会：でも、東欧史というのはそういう所にあるんですよ、諸々のものがクロスしたところの上に。いずれにせよ、全体にアカデミー、歴史学自体が、どんどん孤立化・個別化を進める方向に行っているような気がしますね。何らかのジェネラルなものを見出す方向ではなくてね。

小沢：ただ、ジェネラルというけれども、たとえば時期的に長く見るとか地域的に大きく探るとか、ということだけがジェネラルではなくて、それこそ本当に細かいことをやっても、ジェネラルな問題というのはそこから抽出できるわけでしょう。だから、それが自覚的にできるかどうかという話しになるわけで、そうすると、それは各人の努力にかかっていることですよ（笑）。

結論はあるか

司会：長くなりましたので、まとめに入りたいと思いますが、総括といたって、別に何もなさそうですが（笑）。

佐原：他のヨーロッパ史の研究会と同じ悩みを抱えている、と。

司会：それとは少し違うと思うなあ。たとえば、イタリア史やスペイン史の場合だと、当人たちは少数者で研究もまだ熟していないと言うかもしれないけれども、「東欧史」に比べれば、遥かに人数は多いし、多分野にわたって研究者がいる。しかも、少なくとも統一以降をやれば一国史ですから。

小沢：有斐閣の概説史シリーズでも、『概説イタリア史』と『概説スペイン史』に対して、『概説東欧史』だからね。少なくとも、出版側、あるいは一般の見方から言うと、「スペイン」とか「イタリア」とかっていう一つの世界がある、と考えるのと同じような形で、「東欧」という一つの世界があると思われるんだよね。

鈴木：ただ、東欧というと十把一絡げに捉えるという見方に対して、それは違うんだということ、東欧史研究会は多少言ってこなかったかな。今までの東欧史研究会の一つの意義としては、そういうことが有り得たと思うんだよね。さすがにマスコミあたりでも、十把一絡げではなくなりつつはあるけれど。

小沢：『概説東欧史』というのは、十年、二十年経ったら、どうなるんだろうか。たとえば、『概説チェコスロヴァキア史』とか『概説ユーゴスラヴィア史』とかっていうものが生まれるというのが、望むべき方向なのか。あるいは、『概説東欧史』のまま、分厚くしていくのか望むべき方向なのか。木戸さんなんかは、「東欧史」やっているんだしたら、もっと社会主義に関心を持って、現在の社会主義国の状況から、いろいろ発想を組み立てていかなければいけない、と言うけれども、どうもそれも古いというか、そう言われて「ああ、そうですか」とやる人も少なくなっているんじゃないかな。

佐原：社会主義自体が、そんなに魅力のあるものじゃないし、社会主義に対する思い入れを持っている者も、そんなにいなくなってしまったし、それは非常に大きいファクターじゃないでしょうか。現実認識から考えると、たとえばヨーロッパ・デタントが進んでいるとか、それまでのいわゆる二分法的なヨーロッパ概念を再検討するという方向性は出て来ていると思いますね。

小沢：逆に、ECみたいな形でまとまることになる、その対概念として「東欧」という形で捉えることが出来るかどうかね。そういう枠組みが再び強くなるかもしれないし、あるいはそれが解体していく方向になるか。

司会：そのうち『概説EC史』になって、『概説イギリス史』なんて書けなくなるかも知れませんね。

佐原：二十年くらい経つと、きっとそうなりますよ。

司会：たとえば、文化人類学などでいう「地中海世界」にしても、「地中海世界」なんていうことが本当に言えるのかというと、さしあたりテーマによって腑分けするしかないわけですね。だから、ある意味では、戦間期の政治については、「東欧」と括弧することで分かってくることもあるかも知れませんね。

篠原：時代区分と同じで、地域区分というのも一つの主張ですからね。だから、「地中海世界」というのも、ある一つのテーマについての主張ですからね。

小沢：よく言われる「南欧史」というのについては、どうなの。

司会：ほとんど意味ないですよ。あれも「西欧」に対する別の対概念であってね。でも、あれはアングロ・サクソンの発想なのかなあ。アメリカ合衆国でも、「南欧」とい

う発想は強いですからね。それこそ、場合によってはギリシャなんかも入ることがありますから。そうすると、ある程度、「地中海世界」と同義ということになるんだろうけれども、じゃあフランス南部はどうなるのか、ということになっちゃうし、イタリアだってあれだけ南と北が違うのに、それを一緒くたにするのかということになるし。結局、「南欧」というのは、西ヨーロッパの人間が自分たちと対置するための表現の一つのような気がしますね。イングランドと、フランス北部と、そういう意味ではさっき小沢さんが言った、オランダとかベルギーとかも、この中に含まれると思うけれども、そういった地域の人々が、自分たちとそれ以外の人間たちを区別する一つの方法じゃないかと。となると、我々が、一体それにどこまで乗る必要があるのか、ということですね。我々自身の見方を、どういう風に立てるのか。

小沢：そう、だからそこを詰めないといけない、というかね。

司会：という所が結論かな（笑）。でも、どういう風に詰めるかとか、どういう風に詰まりそうか、というのは全然まだない、と。

佐原：枠組みを検討し直して行って、それを支えていたイデオロギーを掘り起こすことが一つと、それに対置して自分が何を考えるか、という所からまた始めるということ。そういう所が、今日の成果なんじゃないでしょうかね。

小沢：それぞれについては、かなり既存の枠組みが潰れつつあるんじゃないですかね。ただ、それに替わるものがないからね。まあ、大家の時代が終わった後の狭間ですから。そのうち大家が現われるだろうと（笑）。

座談会雑感：この座談会は、クリオ第4号の特集として企画された。まずは、快く出席を引き受けて下さった5人の出席者に感謝したい。だが、座談が終わった後の、一同の気分は沈滞していた。それは、あの日の寒さが然らしめることもあったと思うが、それ以上に、内容的に満足のいく座談が出来なかったという、出席者が共通に感じた印象の故であったと思う。その因はいつに、討論すべき話題を十分に吟味せず、座談に臨んでしまった司会にある。いつか、この座談を叩き台に、もう一度会を催したいとも考えていたが、出席者のうち、鈴木広和氏が座談会直後にブダペストに旅立ち、また木村真氏が10月にソフィアに旅立つという状況の中で、それも次第に適わぬこととなっていった。従って、この座談は「お蔵入り」になるハズであった。しかし、クリオ第4号の原稿締切が近付いたある日、原稿を出せない心苦しさを感じていた

私は、ふとあの日のテープを聞き直してみる気になった。携帯用再生機で、町を歩きながらテープを聞いていた私は、そして、思わず居ずまいを正すべき思いを感じたのである。3時間にも及ぶ、寒い日の熱い座談会を、それから数日間で急いでおこしたのが、この記録である。この座談会に、多くの欠陥があることは十分に承知している。ここで、この話題に言及しておけば、この話題をもっと突っ込んでおけば、と感ずる箇所も多々ある。だが、課題とされる主要なテーマについては、それなりに議論ができたものと思う。何より、あの「東欧」激突の前に行なわれた座談であることに、私は価値を見出だす。座談の行なわれた時期を頭に入れながらお読みいただければ、一層味わいの深いものになるのではなかろうか。

最後に、現在、ブダペストに留学中の鈴木氏、ソフィアに留学中の木村氏をはじめ、この座談会に出席された参加者の皆さんの、さらなる研究の進展を願って、編集の後記に代えさせていただきたい。